

## 助動詞の相互承接からみたテンス・アスペクト

紙 谷 栄 治

一

現代日本語の述語は、述語動詞（本稿では形容詞・形容動詞のばあいをとりあげないことにする）に多くの助動詞等が続くことができるという特色がある。たとえば「書く」という動詞は単独で述語動詞としてつかわれるほかに、「書かせたくなかつたらしい」のように多くの助動詞をともなつて述語となることも可能である。このような現代日本語助動詞の相互承接の現象を明らかにすることは、それ自体重要であるとともに、個々の助動詞についてかんがえるうえでも重要な手がかりをあたえてくれるようにおもわれる。そこで、本稿では助動詞の相互承接の概略を示し、それとの関連でテンス・アスペクトの問題について論じたいとおもう。

なお、私は本稿でとりあげる問題について本稿の末尾に引用文献

としてあげたような考察を發表している。しかし、それらにおいては、順次考察をすすめたことによる不統一や全体的な把握ができていない点や誤りがある。本来ならば全面的に改めるべきところであるが、今回はその時間的なゆとりもないまま、最小限度の訂正をおこなうとともに、問題をできるだけ総括的にとらえるようにしたいとおもう。ただ、紙面が限られていて諸説について十分検討することができないため、多くのばあい私見をのべるにとどまることをおわびする次第である。

二

本章では、前稿（紙谷1982）において助動詞の相互承接についてのべたことを簡単にまとめ、かつそれが後でとりあげるテンス・アスペクトの問題とどのように関係しているかについておのべる。

述語動詞およびそれに「(き)せる」「(ら)れる」「(たい)などの接尾辞がついたもの(仮に(A)とよぶ)は、つぎの第一表のように、肯定・否定と過去・非過去のくみあわせのうちいずれかをあらわす。鈴木重幸氏等のよびかたによれば、「みとめ方」と「テンス」という二つのカテゴリーをもっているのである。

|    |     |       |
|----|-----|-------|
| 肯定 | 非過去 | 過 去   |
| 否定 | —ない | —なかった |

それに対して、「らしい」「ようだ」「みたいだ」「そうだ」など(B)とよぶことにする)は、(A)の後すなわち述語動詞が肯定・否定および過去・非過去をあらわしたものに下接するとともに、それ自身、(A)と同様、つぎの第二表のように「みとめ方」と「テンス」の二つのカテゴリーをもつと考えられる(ただし「らしい」は否定形をとりにくい)。

|    |            |                |
|----|------------|----------------|
| 肯定 | 非 過 去      | 過 去            |
| 否定 | ようだ (は) ない | ようだった (は) なかった |

以上のように、(A)(B)がともに肯定・否定と過去・非過去の対立を示すことができ、かつ(A)(B)の順に承接することができるのであるか

ら、「ようだ」を例にとると

- (1) 書くようだ／書くようだった  
書いたようだ／書いたようだった
  - (2) 書かないようだ／書かないようだった  
書かなかったようだ／書かなかったようだった。
- のような組みあわせが可能である。「ようだ」が否定形をとる場合には、述語動詞が否定形であれば否定形が重ねてあらわれることも考えられるが、まだ考察するに至っていない。それぞれつぎのような例文をあげることができる。

- (3) 実際、あちらの人たちは何かにつけ花を贈られ贈るようだ。  
(北杜夫『へそのない本』)
- (4) クリスマスの音楽、自動車の警笛、そんな街の音は、徐々に高くなって行くようだった。(原田康子『挽歌』)
- (5) さすがの佐藤さんも驚いたようである。(曾野綾子『ぜったい多数』)
- (6) 「(略)。そしたら、下宿の若い奥さんが出てきて、なにかひどくこぼしてたようだったわ。(略)」「(五木寛之『内灘夫人』)
- (7) 「万歳旗」の方は未だ訂正が行われていないようだ。(末広 恭雄『魚と伝説』)
- (8) 当然のことながら、特に新しい進展は見られないようだった。

(笹沢左保『遙かなりわが愛を』)

(9) しかしこのような古い時代では、カツオは殆ど生では食べな  
かったようだが、(『魚と伝説』)

(10) しかしそれはうまくいかなかったようだった。(三浦朱門  
『権田』)

このことは「らしい」のばあいも同様である。

(11) 書くらしい／書くらしい

(12) 書いたららしい／書いたらしかった

(13) 書かないらしい／書かないらしかった

(14) 書かなかつたらしい／書かなかつたらしかった

ただ、今のところ最後の「書かなかつたらしかった」に相当する例  
は見出してない。すべての用例をあげるとは省略するが、用例  
数がそれほど多くないものをあげておく。

(15) あたりはかなり暮れている。平吉も電灯をつけたららしかった。  
(『ぜったい多数』)

(16) 弘一は、清子の面相が変つたのに驚いたららしかった。(有吉  
佐和子『針女』)

(17) (略)と、看護婦が声をかけても、夕子はきこえないらし  
かつた。(水上勉『五番町夕霧楼』)

(18) そういう意味ではない、と霧子は言葉すくなくに答えたが、英

子には通じないらしかった。(『内灘夫人』)

このように、助動詞の相互承接という観点からみると、述語動詞  
のテンスと「ようだ」「らしい」のテンスはどのような関係がある  
かが問題になってくるであろう。述語動詞は「ようだ」「らしい」  
などにつづくことも、続かないでそのまま終止することも可能なわ  
けで、そのばあいどのような差異を生じるのかについても考える必  
要がある。次章ではこの点についてとりあつかうことにする。

### 三

前章までにおいては、タ形と非タ形の対立は、過去・非過去とい  
うテンスに関する意味をあらわすとしたが、私は、環境によっては  
アスペクトに関する意味をあらわすことができると考える。ただ、  
そのようにいうためには、どのような環境のもとでテンスまたはア  
スペクトの意味をあらわすのか、またアスペクトの意味としてはど  
のようなものが考えられ、テンスの意味とはどのように異なるのか  
を明らかにしなければならぬわけである。以下、そのような観点  
からテンス・アスペクトの問題を論じてみたいとおもう。

(19) それくらしいの分量なら、以前は一日で書いた。

(20) 原稿用紙十枚分をやつと書いた。

では、(19)は過去、(20)は完了をあらわすといわれることがある。この両者を区別しないという考え方もありえようが、やはり分けるのがわれわれの感覚から言っても自然だとおもう。ただ(20)を「完了」とするばあいでも、それが非タ形の何に対応するのかを明確にする必要があるとおもう。私は、(19)のような「過去」は、

(21) それくらの分量をあす一日で書く(予定だ)。

(22) それくらの分量なら、一日で書く。

のように「現在」「未来」と対応するとかんがえるが、(20)の「完了」をあらわすばあいも、以下のように考えれば、対応する用法があるとおもう。そこで、このように文末に用いられたばあいをひとまずおいて、つぎのようなばあいから考察をはじめることにする。

(I) 時をあらわす条件節においては、タ形・非タ形はつぎの第三表の傍線の部分のように、互に対応する意味をあらわすと考えられる。

第 3 表

|             |                                    |        |                                     |
|-------------|------------------------------------|--------|-------------------------------------|
| 非<br>タ<br>形 | 〔将然〕<br>カーブにさしかかるときに前もってスピードをおとした。 | タ<br>形 | 〔既然〕<br>カーブにさしかかったときにはじめてスピードをおとした。 |
|             | 〔過程〕<br>カーブをまがるときはスピードをおとすにつけ      |        | 〔完了〕<br>カーブをまがったときにはじめてスピードをあげた。    |

このことは、右の「」内にあげた意味をあらわすばあい、つぎの第

助動詞の相互承接からみたテンス・アスペクト

四表のようにタ形・非タ形のいずれをとるかがきまっていることも考えあわされる。

第 4 表

|             |                                    |        |                                     |
|-------------|------------------------------------|--------|-------------------------------------|
| 非<br>タ<br>形 | 〔将然〕<br>非タ形+以前・まえ・寸前・まで(に)(例 書くまえ) | タ<br>形 | 〔既然〕<br>タ形+のち・あと・途端(完了)<br>・うえ(に・で) |
|             | 〔過程〕<br>非タ形+あいだ・途中(例 書くあいだ)        |        | (例 書いたあと)                           |

なお、第三表の例文では文末を過去形にしたが、もちろん非過去形であっても傍線部については同じである。

(II) 以上のような条件節においてみられることは、つぎのような関係節のばあいでも同じである。

(23) カーブにさしかかる車の光がみえる(みえた)。(将然)

(24) カーブにさしかかった車の光がみえる(みえた)。(既然)

(25) カーブをまがる車の光がみえる(みえた)。(過程)

(26) カーブをまがった車の光がみえる(みえた)。(完了)

また、つぎの例文のように、動詞が動作をあらわすに、空間を表現する文脈でつかわれたばあいも同様である。

(27) 道が細くなる所に標識が立っている(立っていた)。(将然)

(28) 道が細くなった所に標識が立っている(立っていた)。(既然)

(29) 橋をわたる所とわたった所に小屋がある(あった)。(将然と完了)

(Ⅲ) つぎのように「らしい」「ようだ」「みたいだ」「そうだ」につづくときも、(Ⅰ)・(Ⅱ)と同様のことがいえる。

(30) 車はライトをつけた。どうやらトンネルにはいるらしい(または、ようだ)。(将然)

(31) 車内はまっくらになった。どうやらトンネルにはいったらしい(ようだ)。(既然)

(32) 車は大きくかたむいた。どうやら急なカーブをまがるらしい(ようだ)。(過程)

(33) 車は再びスピードをあげた。どうやら急なカーブをまがったらしい(ようだ)。(完了)

右の例文の文末の助動詞が過去形であっても、傍線部の意味はかわらない。

(Ⅳ) 「ので」「から」「が」などの接続助詞につづくばあいも(Ⅰ)・(Ⅲ)と同様のことがいえる。

(34) 車はトンネルに入る(から)ライトをつけた。(将然)

(35) 車はトンネルに入(った)ので(から)車内がまっくらになった。

(既然)

(36) 車は急なカーブをまがる(ので(から))大きくかたむいていた。

(過程)

(37) 車は急なカーブをまが(った)ので(から)再びスピードをあげた。(完了)

以上の(Ⅰ)・(Ⅳ)の例文にみられるように、文末以外に用いられたいタ形と非タ形の対立は、主文のあらわす時とは独立して、かつ体系をなしてそれぞれの意味をあらわしている。そこでこれらの意味をアスペクトに関する意味とかがえておきたいとおもう。なお、従来アスペクトに関する意味をあらわすものとして、「はじめる」「かける」「てしまう」「おわる」「や」「ている」などの形があげられた。しかし本稿では、そのうちの前四者は

(38) 橋をわたりはじめる車(将然)

(39) 橋をわたりはじめた車(既然)

のように、すべて上にあげたタ形・非タ形の対立のいずれかをとるということをかがえ、語彙的な問題としておく。また「ている」の形については、例文(29)(30)のように非タ形が「過程」の意味をあらわすばあいに、その意味をより明確にするためにつかわれるものであるとかがえ、以上にのべたアスペクトの体系のなかに位置づけることにする。また「ている」が「過程(進行中)」以外の意味をあらわすばあいについては後述する。

以上のようにアスペクトの体系を仮定し、それが時をあらわす条件節・関係節・「らしい」等の推量助動詞につづくばあいおよび「から」「ので」「が」などの接続助詞につづくばあいに一貫してみとめられると考えたのであるが、それらはすべて非終止の用法として位置づけることができよう。とすれば今までとりあげなかつた、文末にタ形・非タ形の対立がくるばあい（以下、終止の用法とよぶことにする）はどうであらうか。私はアスペクトについていえば、終止の用法のばあいも、先の非終止の用法のばあいと同様のことがいえるとおもう。

| 表 5 第            |                   |
|------------------|-------------------|
| 非                | タ                 |
| 〔未然〕 あ！帽子が飛ぶ！    | 〔已然〕 あ！帽子が飛んだ。    |
| 〔過程〕 来るよ。電車が来るよ。 | 〔完了〕 やっとレポートを書いた。 |

ただ終止の用法のばあいには、右の第五表にみられるように、発話時点における動作の形態をあらわすばあいに限られるようである。先にふれた例文⑩のように、タ形が「完了」をあらわすとしたばあいに ついても、この表の「完了」の欄に位置づけてかんがえることができるのではないだろうか。

終止の用法におけるタ形と非タ形の対立を以上のように考えるならば、なぜアスペクトの意味の体系が非終止用法において典型的にみられ、終止用法においては発話時における動作の形態をあらわす

ばあいに限ってみられるのが問題になる。その点については、タ形と非タ形はテンスとアスペクトのいずれをもあらわしうるが、文末すなわち終止の用法においては発話時を基準とした時をあらわす必要があるためにテンスの意味があらわされ、それをあらわす必要のない非終止の用法においては、テンスまたはアスペクトの意味があらわされるのだ、また終止の用法であっても発話時点における動作のばあいには、時を捨象することができるためにアスペクトの意味があらわされるのだ、とかんがえたい。

また、以上にのべたように考えたばあい、終止の用法は、アスペクトに関しては、むしろ特別なあらわれ方をする場合ということになり、その意味では非終止の用法の方がアスペクトをかんがえるのに適当だということになる。また、テンスとアスペクトはムードとはきりはなせないとする立場もあるが、終止の用法においてはそのことはいえるとおもうが、非終止の用法においては、ムードと分けてかんがえることができるのではないかとおもう。本稿では、考察を非終止の用法からはじめたが、そのほうが以上のような利点があるとかんがえたためである。

つぎに、動詞の「ている」形についてとりあげてみたいとおもう。「ている」は従来アスペクトをあらわすとされることが多かった。私も「ている」形はアスペクトに関係があると考えるが、その際、

上述のタ形・非タ形のあらゆるアスペクトの意味との関係が問題になると思う。そこでまず、関係節におけるつぎのような両者の関係についてとりあげてみたい。

| 「ている」形      |                          | 非タ形・タ形                 |    |
|-------------|--------------------------|------------------------|----|
| 動作・作用の結果の状態 | (読もうとしていると<br>ころ)        | 読むところ                  | 将然 |
| 経 験         | きちっとしまっている<br>すでに結婚している人 | きちっとしまったまど<br>すでに結婚した人 | 已然 |
| 単なる状態       | 道端にへばりついている<br>小さな部落     | 道端にへばりついた小<br>さな部落     |    |
| 動作・作用の継続    | チラチラ燃えているカ<br>マドの火       | チラチラ燃えるカマド<br>の火       | 過程 |
|             | すっかり読んでいる人               | すっかり読んだ人               | 完了 |

第 6 表

第六表のようにみると、「ている」形は、タ形・非タ形のあらゆる「過程」および「已然」「完了」と関係するものようであり、前者は動作の継続の状態、後者は「已然」「完了」後の状態をあらわしたものとみることができよう。そのように考えるならば、アスペクトについては、「ている」形を基準にするよりも、タ形・非タ形のあらゆる意味の体系にもとづいて考える方が適当だということになる。また、「ている」形を基準にしたばあい、それが状態をあらわすため、「まだ書かないでいる」のように否定形にもつづくが、このようなばあいをアスペクトをあらわすものとして位置づけよう

とするとむづかしいことになる。にもかかわらず、「ている」形が多く用いられ、またそれを基準にしてアスペクトを考える立場が多くとられているのは、非終止的用法においては、動作の「過程」をあらわす方がより明確であるためといえることがかんがえられる。そのほか、終止的用法のばあいには、上述のようにアスペクトの意味をあらわすことが制限されているためということも考えられよう。なお、「ている」形に関連していえば、鈴木重幸氏<sup>1988</sup>はテンスとアスペクトの関係をつぎのようにかんがえられている。

第 7 表

| テンス   |     | アスペクト |     |
|-------|-----|-------|-----|
| 現在未来形 | 完成相 | ～シテイル | ～シタ |
| 過去形   | 継続相 | ～シテイタ | ～シタ |

すなわち、「完成相」と「継続相」とがアスペクト的な意味で対立し、「現在未来形」と「過去形」とがテンス的な意味で対立するとされるのである。しかし、氏のようにかんがえらると、さきに第六表に示したような、「ている」形とタ形・非タ形との関係が見失われてしまうということはないだろうか。

最後に、瞬間動詞と継続動詞の別についてふれておきたい。本稿の立場では、瞬間動詞と継続動詞の別は、動詞のアスペクト的な分

類による区別だとかんがえられるが、両者は動詞単独できまるのではなく、そのタ形・非タ形がどのようなアスペクト的な対立を示すかによって区別されるとかんがえる。すなわち、タ形・非タ形が、

「将然」と「既然」という対立だけをあらわす動詞を瞬間動詞、それに加えて「過程」と「完了」という対立をもあらわす動詞を継続動詞とかんがえるわけである(第三表では意味を際立たせるために「さしかかる」と「まがる」という二つの動詞をつかった。前者は「将然」と「既然」の意味しかあらわさないから瞬間動詞ということになる。後者は表にあげた「過程」と「完了」のほかに、「交差点をまがる」のときに、はじめて左側によった(または「まがる」のときに、はじめてはじめて……)。「交差点をまがった」のときに、大きな建物がみえてきた(「既然」のようにつかうことができるから、継続動詞ということになる)。もし動詞の「ている」形が「動作・作用の進行中」をあらわすばあいを継続動詞、「動作・作用の結果の残存」をあらわすばあいを瞬間動詞とすると、継続動詞のばあいは、

(40) 彼はいまその本を読んでいる。

(41) 彼は若いときにその本を読んでいる。

のうちの(40)のように、動作が進行中であることをあらわす以外に、(41)のように本来瞬間動詞があらわすはずの動作の結果の残存・経験をもあらわすことになるため、両者の区分が困難であった。そこで

助動詞の相互承接からみたテンス・アスペクト

本稿では、それにかえて、本稿でいうアスペクトの体系にもとづいて、動詞を分類することができるのではないかと考えたわけである。

#### 四

前章においては、タ形・非タ形の対立はテンスとアスペクトのいずれをもあらわすとしたうえで、アスペクトについて略述した。本章では非終止的用法、次章では終止的用法におけるテンスの意味について考えることにする。

(一) 関係節のばあい。

(42) ① そのつきにくるバスは、九時に発車するはずだった(しかしてでもない)。(くることになっていたバスの意)

② くるバスは、どれも満員だった。

③ この停留所にくるバスは、以前はすべて駅前発着のものだった。

右の①~③のようなばあいの傍線部については、①は「予定」「予測」、②は「反復」「習慣」、③は「属性」をそれぞれあらわすとかんがえる。①と③については、傍線部の「くる」を「きた」にかえれば、「予定」「属性」の意味をあらわさなくなり、かわりに過去において動作が実際におこなわれたことをあらわすことになる。②のばあいは、「くる」でも「きた」でも意味のうえで大きな違いはない。

いようであるが、「くる」のばあいには、つきつきくるバスの範囲を特に限定しているのではないのに対して、「きた」のばあいには、実際に来たバスに限ってのべられるというように、微妙なちがひがあるようにおもわれる。右の例文はすべて主文が過去をあらわしているのであるが、その関係節中の非タ形は、それがタ形でないことよって、それぞれが実際におこなわれた特定の動作ではなくて、その動作が①予定されている、②反復されている、または習慣となっている、③属性とかんがえられる、ということをおあらわすものとみることができるのである。

それでは①③の「くる」を「きた」にかえたばあいにはどのようになるだろうか。まず①のばあいは「予定」の意味ではなりたなくなる。②③のばあいは、過去において実際におこなわれた動作をおあらわすこととなり、「反復」や「属性」の意味は失われてしまうとかんがえられる。すなわち、②③のばあいには、修飾語句や文脈の助けがなければ、それが「反復」や「属性」であることをあらわせなくなるのである。以上のような理由で、関係節中のタ形は、一括して「過去」をおあらわすものとかんがえる。

(II) 時をおあらわす従属節中のばあい

43 ① そのつきにくるときに本を返すつもりだった。

② 彼がくるときには、きまって用事で忙しかった。

③ 彼は、みんなで協力して働くときには来ず、勝手なときにやってきた。

これらのばあいの非タ形も、主文が過去をおあらわす文のうちの時をおあらわす従属節中で用いられたものであるが、先の(Ⅰ)と同様、従属節中で傍線部が非タ形をとることよって、①予定、②反復、③属性の意味をおあらわしているとみることができると、また、傍線部の非タ形がタ形にかわると、(Ⅰ)のばあいと同様、①はそのままの意味ではなりたたなくなり、②③は過去において実際におこなわれた動作をおあらわすことになる。したがって、そのばあいのタ形も「過去」をおあらわすとかんがえる。

(Ⅲ) 「らしい」「ようだ」などにつづくばあい。  
44 ① 彼はその翌日、早速親類の家に出かけるようだった。  
② 彼はいろんな人の所に出かけるようだった。  
③ その停留所には駅前発着のバスだけがくるようだった。

(Ⅳ) 「ので」「から」「が」などの接続助詞につづくばあい  
45 ① どうせ彼はその翌日にはくるのに、わざわざその日のうちに彼のところへ出かけていった。  
② つきつきくるのに、どのバスも満員だった。  
③ 駅前行きのバスならその停留所にもくるのに、少しも利用しなかった。

以上の(Ⅲ)(Ⅳ)のばあいも、(Ⅰ)(Ⅱ)と同じことがいえるはずである。

ところで、例文(42)～(45)の①の傍線部をつけた非タ形を「予定」をあらわすものとかんがえたが、その点については、いろいろな解釈がありうるとおもわれる。たとえば、高橋太郎氏(1974)のように、従属節中の連体形は、絶対的テンス(非タ形Ⅱ未来、タ形Ⅱ過去)、相対的テンス(非タ形Ⅱ主文のことがらに對して相対的な未来すなわち以後、タ形Ⅱ同じく相対的な過去すなわち以前)、アスベクト(非タ形Ⅱ「動作のおこし」「動作の過程」、タ形Ⅱ「動作の終了成立」)をあらわすとされる。例文(42)～(45)のそれぞれの①は、主文が過去をあらわしており、かつ従属節中の動詞が非タ形をとっているので、氏によれば傍線をつけた非タ形は「相対的なテンス」、このばあいには主文の時より以後であることをあらわすということになるであろう。しかし、例文(42)～(45)のそれぞれ非タ形は、修飾語(波線で示す)さえかえれば

- (46) このつきにくるバスは、九時に発車するはずだった。(しかしまだきていないの意)
- (47) 明日くるときに本を返すつもりだった。
- (48) 彼は明日、早速親類の家に出かけるようだった。
- (49) どうせ彼は明日くるのに、わざわざその日のうちに彼のところへ出かけていった。

助動詞の相互承接からみたテンス・アスベクト

るへ出かけていった。

のように、絶対的テンスすなわち発話時を基準とした未来をあらわすことになってしまう。そのようなばあい、双方の非タ形にはたして相対的テンスと絶対的テンスのちがいがあのか、考える余地があるようにおもふ。また

60 予定では九時につくバスが二十分ほどおくれついていた。(予定では九時につくはずのバスの意)

のようなばあい、発話は九時二十分以降になされたことになるから、「九時につくバス」の「つく」が絶対的テンス(未来)をあらわすと考えることはできないし、また修飾語の前後関係からいっても、関係節中の「つく」は主文の「ついた」とくらべて「以後」ということにはならないから相対的テンスをあらわすと考えることもむづかしいとおもう。本稿では、関係節中の「つく」は、主文のテンスとは関係なく用いられており、また発話時点とも関係なしに、ただ「予定」の意味をあらわすために用いられていると考えたい。つまり、予定の内容をあらわすばあいには、発話時を基準とした時のいかに問わず(もちろん主文のテンスとも関係なく)非タ形をとるということになるのである。このことは、「予定」のほかにも、「復」(「属性」)をあらわすばあいについてもあてはまる。

以上で、非終止的用法におけるテンスの意味として、「予定」(予

測)「反復(習慣)」「属性」の三つをあげたが、そのほかに「中立的な用法」でもよぶべきものがかんがえられる。これは、たとえは

61) その仕事を短時間でおえるのことはむづかしいことだった。  
のように非タ形であらわされる。

ところで、以上にテンスの意味としてあげたものが、なぜテンスに属するかについてはこれまでふれてこなかった。その根拠としては、体系をなしているとかんがえられるアスペクトの意味とくらべたばあい相違するところがあるというようなことが考えられる。しかしそのことは十分な根拠とはなしえない。そこで、この問題についてとはひとまずおいて、つぎに終止的用法におけるテンスの意味についてみることにする。

## 五

終止的用法におけるタ形・非タ形の対立は基本的には発話時点を基準とした時を示すとかんがえられる。すなわち非タ形は「非過去」を、タ形は「過去」をあらわすわけである。このことを、非終止的用法との関係でいえばつぎのようになる。非タ形についていえば、まず例文①のような「予定(予測)」をあらわすばあいは、終止的用法においては発話時(現在)という制約をうけて、「現在における予定(予測)」の意味をあらわす。

62) このバスは九時に発車します。

63) この分ならもうすぐ降りだすよ。

例文②のような、「反復(習慣)」をあらわすばあいは、終止的用法においては「現在における反復(習慣)」をあらわす。

64) バスが何台もくる。

また例文③のような「属性」の意味をあらわすばあいは、「現在における属性」の意味をあらわすことになる。

65) この停留所には、駅前発着のバスがくる。

なお、例文61)のような、前章で「中立的な用法」としたのも終止的用法としてもつかうことができるが、もちろん時はあらわさない。

66) その仕事を短時間でおえる。そんなことは至難のわざだった。

つぎにタ形についていえば、終止的用法のばあいも非終止的用法のばあいと同様、「過去」をあらわすとみることができ。終止的用法におけるタ形は、修飾語や文脈などによって、「過去における動作・作用」「過去における反復(習慣)」「過去における属性」をあらわすとかんがえたい。

このようにみれば、前章で非終止的用法におけるタ形・非タ形のテンスの意味としたものは、終止的用法においても発話時を基準とした時による制約をうけながらあらわされるわけである。そのばあいは、「予定」「反復」「属性」などとしたものは、終止的用法においては

発話時を基準とした時と不可分である（アスペクトのばあいはそのと独立している）ために、それを終止的用法におけるテンスの意味として考えるなら、非終止的用法についてもそれに準じてテンスの意味としてとりあつかうことは可能ではないかとおもふ。

以上をまとめると、タ形と非タ形の対立は、テンスに関する意味としては、終止的用法・非終止的用法を通じて、「過去」と「非過去」をあらわすが、非終止的用法における「非タ形」は発話時を基準とした時をあらわすものではないとすることができる。

## 六

以上、現代日本語におけるテンスとアスペクトの問題について意見をのべた。その中心となる点は、タ形と非タ形の対立が、どのような環境において、どのような意味をあらわすかというところにあったが、私はその環境を、終止的用法と非終止的用法にもとめたわけである。終止的用法と非終止的用法とにわけることにはなお検討が必要であるが、このわけ方は、第二章でのべたような助動詞の相互承接の現象のとらえ方をしたばあいには、可能になってくるのではないだろうか。タ形と非タ形の対立は、一文中で、または述語内部でさえ複数回あらわれるのであるから、それぞれが異った機能や意味をあらわすことになることは十分考えられるのである。本稿

はその観点に立った一つの考察であるが、ご批判をいただきたいとおもうものである。

### 〔引用文献〕

- 鈴木重幸「983」形理論的なカテゴリーについて」（『教育国語』72号・むぎ書房）
- 高橋太郎「974」連体形のもつ統語論的な機能と形理論的な性格の関係」（『教育国語』39号・むぎ書房）
- そのほか、「日本語学」1989年7月号の特集「動詞・助動詞の問題点―テンス・アスペクト―」所収の論文およびその引用文献が有益である。
- 紙谷栄治「977」助動詞「た」の「解釈―形式名詞「とき」につづく場合を中心に―」（『京都府立大学学術報告人文』第29号）
- 1978 「連体用法におけるテンスに関する意味について」（同第30号）
- 1979 「終止用法におけるテンスとアスペクトについて」（『国語学』第128集）
- 1979 「た」の特殊な用法について」（『京都府立大学学術報告人文』第31号）
- 1979 「ている」について」（『語文』大阪大学、第36輯）
- 1982 「助動詞の相互承接についての一考察」（同第40輯）
- なご用例はつぎによった（書名は略記。「新」「角」「文」「集」はそれぞれ新潮文庫・角川文庫・文春文庫・集英社文庫をあらわす）。
- 「内灘」新4刷。「五番」新25刷。「魚と」新6刷。「針女」新昭56年。「ぜったい」角6版。「楳田」集3刷。「遙か」文1刷。「挽歌」新21刷。「へそ」新昭51年。